

# 成人の読書への関わりと言語力

立田 慶裕

国立教育政策研究所総括研究官

皆さんこんにちは。今日は御多忙の中を「生涯にわたる読書」にお集まりいただきましてどうもありがとうございます。大変お忙しい中、また、8月の上旬は読書に関するシンポジウムが多い中、その間をぬって駆けつけていただいた皆さんに改めて御礼を申し上げたいと思います。

皆さんが集まって来られているのは、もう既に皆さんが読書に関する興味を非常に持っておられて、読書活動あるいは図書館活動を何かしたいと考えておられる方が多いのではないかと思います。この時点で既に多分、私が今からお話しする読解力という点では、すでに読解力をお持ちではないかと考えております。

今から私、わずか20分ちょっとですけれども、大人が本に関わるということが読書活動にとって非常に大事だということをお話しさせていただきたいと思います。

私、本をよく読むのですが、先ほど五十嵐先生の資料の中で子どもたちの資料を見ましたら、勉強の前に読書をするとう勉強がよくできるという感想がありましたが、私も実は必ず大体何か仕事をしようという前にちょっと本を読むという習慣があります。

昨日も本を2冊読んでおりました。

そのうちの1冊は、前に一度読んでいたのですけれどももう一度読み直した本。これは詩人の長田弘さん、「読書からはじまる」。この中で、こんなふうに語っています。「すべて読書から始まる、本を読むことが読書ではありません。心の中に失いたくない言葉の蓄え場所をつくり出すのが読書です」と。言葉を蓄える場所というのが、いい表現です。もう一つの例として長田さんが話しているのですけれども、女性の投稿を読んでいたら、旦那さんは結構本を買う。本を買うのだけれども、買って来た本を読まない。ところが、女性の方は本を買わないのだけれども、図書館で本を借りてしっかり読む。これは一体何のことかと思っていましたら、本を読むということは、単に情報を収集することだけではないのはいか、本とどう関わるかということが大事なのではないかということです。今日

の私のテーマは、これに関わっています。

先ほど井上先生から、メディアの話がありました。そのメディアが氾濫してきております。今日来ておられる中に今井書店の永井さんがおられるのですが、その方が学べと勧め



る電子出版などは非常に最近気になります。電子出版などを見ていると、情報量がたくさん流れている。たくさんのメディアがある中で、本というのがどういう価値を持つのかをもう一度見直す必要があるのではないかと思います。

徳永所長の挨拶の最後にありました、エビデンス・ベイスド・リサーチという言葉、難しい言葉なのですが、エビデンスは根拠です。ベースというのは基づく。根拠に基づく研究をしていかなければいけない、ということを仰っているのですが、医学に関しても、同じようなエビデンス・ベイスド・リサーチは進んでおります。ところが、河合隼雄さんに言わせましたら、エビデンス・ベイスド・リサーチは非常に大事だと。それは医学の研究にとっては大事。だけど一方で、患者にとってみたら、ナラティブ・ベイスド・リサーチも大事だとおっしゃっているのです。ナラティブ・ベイスドとは何か。物語に基づく、患者さん一人一人にはストーリーがある。ということは、そのストーリーに基づいて対処していくことが大事だと言われているのです。このことが非常に気にかかります。今の私の研究関心です。実は情報へかかわるということと、それから本を読むこととはどう結びつくのか、それが今日の私の研究発表のテーマでもあります。

資料をご覧ください。一番最初に、普段どういう読書習慣を持っているか、読書への関わりが読解力にどう影響するかを明らかにするということを書いております。この社会人の調査ですけれども、500人を対象にネット上で行って、できるだけサンプルを全国の人口分布に合うような形で行いました。

その結果、本をたくさん読んだ人というのは、20代、30代は3割を超えている、3人に1人は読んでいる。40代以上の層でたくさん読む人は2割前後に減少している。だんだんと年齢が高くなるにつれて本を読む人が減っていくという状況です。さらに、最近1カ月の読書量を表2として挙げています。これがその状況を表しております。それから、図6から図10までは、年代別にどんな本を

よく読むかを示しております。この結果を見ますと、男性の30代では、専門書とか解説書とか、歴史・時代小説、それから実用書が多くて、仕事の必要性に応じた読書というのが非常に多い。女性は、30代になると、ミステリーや推理小説、SFやファンタジーの読書が増えている。また、男女いずれも50代になると読書の傾向が変わって、マンガが読まれなくなり、実用書、専門書の比率も下がっていく。男女ともに歴史・時代小説の読書が増えて、60代ではマンガを読む人は本当に少なくなり、歴史・時代小説とミステリーが中心となっています。

私自身、実は57歳でして、NHKで「まっつぐ」という、佐伯泰英さんの「鎌倉河岸捕物控」原作の小説をちょっと読み始めているのですけれども、結構私自身の感覚からしても、やっぱり時代小説が何となくなじむような気がしています。それがなぜなのかはちょっとよくわかりませんが、ミステリーも結構読むので、東大の大学院生の方から東野圭吾を勧められて、面白いからはまってしまいました。加賀恭一郎シリーズ全部をそろえてしまったのですけれども、この間、図書館へ行きましたら、東野圭吾の本が足りないから寄附してくださいという掲示がありました。

また、年齢に合わせて読書時間も変わってきます。20代のときに比べて60代の方が本当は読書時間が増えているにもかかわらず、なぜ本を読む人が減るのか、ちょっと難しいところだと思います。

読書の目的についてもふれていますけれども、読書の目的では、「知らない情報を得るため」が最も多い。ただ、その目的を男女別に見ると、女性では気分転換のため、感動を得るため、空想したり夢を描くことができるから、生活に必要な知識を得るためという目的の比率が高く、男性では、時代の動きや流行を知るため、物事を深く考える手がかりを得るため、ほかの人との話題づくりのため、仕事に必要な専門的な知識を身につけるためといった目的の比率が高くなっている。女性の方がどちらかといえば想像力とか楽しいという目的で本を読むのに対して、男性は、自分を高めたりとか、自己啓発的理由とか、やはり情報をとりたいという、そういう傾向で本を読む方が多いようです。

これがどういう意味を持つのか、今回の調査ではっきりしていないのですけれども、今回の調査では、特に人に注目して、本を読むように勧めてくれる人がいるかないか調べたのですが、男性では、20代、30代は母親や友人、職場の人が多く、40代、60代では妻の勧めも増えている。女性では、20代に両親や友人、職場の人が多く、30代以降はもっぱら夫や友人の勧めが多くなっているという傾向が出てきています。つまり、夫婦の間で読書をどう捉えるかが非常に重要

になってきているような感じがいたします。

それから、本を読まない理由として、表 18 を見ていただきますと、性別で見ますと、本を読まなかった理由として、男性は活字が苦手、本を読むのが嫌い、普段から本を読まないというのが多いのに対して、女性は、ほかにしたいことがあったとか、読む必要を感じなかったという結果が出ております。結構男女で、成人の読書活動には大きな違いがあるような気がいたします。

今日の本論は、読書への関わりですので、読書への関わりに特意的を絞って分析した結果を見ようと思います。その前に、先ほどの成人の読書活動というものを、社会的背景、学歴や職業とか年収によってどう違いが出てきているかをあらわしたのが表の 19、20、21 です。これは読書量に限って見たのですけれども、やはり学歴の高い人々、職業もサービス業とか事務的な仕事についている人々、それから、年収の高い人ほどやはり読書量が多いという傾向が出てきています。学歴とか年収とか仕事によって読書が固定されてしまうのかという問題がやはりここにあるのではないかと考えられます。

特に、読書への関わりに私が注目している理由は、OECDのPIISA調査の中で、社会的背景とか出身に関わりなく、読書への関わりを高めることによって、学力格差をなくすことができるのだという傾向がある程度出ております。このことに注目しまして、今回の調査でも、一つは日常的関心に関する項目と、読後どういうことをするかという質問項目を設けています。

図 22 は、日常的関心の項目です。雑誌や新聞の広告をよく見るとか、書評欄をよく読むという回答、それから、自分が読んだ本を人に紹介したり、自分がほかの人から勧められた本を実際にはそのまま読むとは限りませんから、どういうきっかけで本を読むか、本に対してどんな関心を持っているかに関する項目です。

読書後にとる行動として、女性の方では、同じ作者のほかの作品を読むとか、映画化・テレビ化されたものを見るとか、ほかの人に内容を話す、書かれた内容を実践してみるという行動が多い。ところが男性では、わからないことや気になることを調べる傾向が強いという傾向が見られます。

成人の読後の調査の中で唯一非常に回答項目率が下がったのは、図 23 の真ん中あたり、本の中に線を引くということがあります。小学生とか中学生では学習書とか教科書も本の中に入れていきますので、結構それで線を引くことが多い。一方、成人の場合は、公共図書館の本とか結構あるので、やっぱり本の中に線を引くというのはやらなくなっている。代わって、同じ作者の作品を読むとか、わからないことや気になることを調べるというのが高い結果です。

表 24 と表 25 を見ていただきますと、日常的な関心と読書量の間には、例えば読書量が全くない人、0 冊の場合には、日常的関心は非常に低い。一方、読書量が 4 冊以上の場合には高い関心を持つ人が 45% と、読書量の多い人ほど日常的な本を読む関心が高いという傾向が出ております。

一方、表 25 を見ていただきますと、読書量の少ない人の場合には、何もしない人が 24% です。一方、読書量が 4 冊以上の場合には、多くのことをするというのが 43.4% と、読書量の多い人ほど、やはり本を読んだ後、何かの活動につながる傾向が出てきております。

読書量というのは、日常的な関心、それから事後の関わりというものと非常に高い相関関係があることがわかってきたわけですがけれども、普段から本について高い関心を持つ人ほど、やっぱり読書量は多くて、読書中もしくは読書後に、読書と関わる行動としていろいろなことをする人ほど、やっぱり読書量は多くなるという傾向が出てきています。つまり、読書中とか読書後にその本に関わる行動をどれだけとるかによって、読書の関わり方が変わるだろうということをこの結果は示しているわけです。

関わりという言葉ですがけれども、これは英語で engagement と呼びます。この engagement の概念というのは、その背景に、個人が自己決定をする場合に最もよく発達する。自己決定的な読者というのは、その本質からして動機づけられており、自分のため、自分の価値観にしたがって読書にかかわる。読者が自分の多様な関心や目的で本を読み、その場合に、好きなトピックや著者についてのオーナーシップを持つことができる。自分の教育的、職業的、個人的、社会的な目的や活動を追求できるような読書のために、読者は価値や信念、目標を持つのです。

PISA では、学校教育の中でこのように engagement を定義しています。個々の読書への関わりは、生徒の読書の動機づけの特性や行動的特徴に関係している。行動的な特徴として、読書の関わりの構成要素としては、読書への関心、自律性の認識、社会的相互作用、読書の実践という四つがあると言われております。この日常の普段の関わり、読書への関心と、読書の実践という点から、今回の調査はその結果を見たわけです。

大人の方も、実は読解力というものを考察しておりまして、今回の成人向けの読解力では、文章題と e メール、それから図表問題を作成して、15 点満点で読解力の得点をとりました。

この読解力は、実はこれまでに行われてきました国際成人力調査とか、成人の

新しいリテラシー調査に基づいて考えているのですけれども、ここではリテラシーを次のように定義しています。リテラシーは、社会に参加し、個人がその目標を達成し、その知識と可能性を発展させるために、書かれたテキストを理解し、評価し、利用し、関わることであると。この関わることというのが engagement と考えていただくといいかなと思います。このリテラシーについても、関わりが非常に重要だと言われております。

読解力の得点につきましても、実は社会的背景別に見ますと、表 28、29 で示しましたように、学歴とか年齢階層、それから収入別にみて、やはり読解力に大きな差があるということがわかってきています。

どういった社会的背景によって読解力が決定されるか、この問題がやはり大人の場合にはもっと極端に出てくるのではないかと考えられます。だとすれば、読書活動がこういう読解力の格差というものを減らす可能性をやっぱり検討していく必要があるのではないのでしょうか。

そこで、読書への関わりと読解力の関係を見たのですけれども、社会的背景に関わらず、学校教育や成人教育において、読書の機会を増やすことによって読解力を向上していくことも可能になるのではないかと。読書への関わりが高いほど読書量が増して、読書量が読解力に影響するとするならば、読書への関わりが読書量を増大させ、読解力を向上させていくと考えていくことができる。

表 31 には、読書量が増えるほど読解力の成績が上がっているという傾向が出てきています。読解力の分布で低位群と上位群を見ていただきますと、低位群の読書量が少ないのに対して、上位群の読書量は非常に高いという傾向が出ています。ここには確かに社会的背景が影響しているかも知れませんが、そこで次の図を含めまして、日常的な関心の平均値とか事後行動の結果をとってまとめました。すると、低所得層であっても、読書後の行動や日常的な関心をどう持つかということによって、つまり高い読書への関わりを持てるようにすることによって読書活動が活発化し、その結果として読解力を高めていくこともできるのではないかと示されているということです。成人教育の分野での読書活動においても、読書への関わりが増すような読書教育活動をどう展開していくかということが、読解力とか、もしくはリテラシーの向上につながっていく可能性があることを、こうした調査結果が示しているのではないかと考えます。

それに対して、最後に下の表 33、34、35 は、先ほどの本の読み聞かせが小学生、中学生に影響を及ぼしているということがありましたけれども、大人の場合も、実は小さいときに本の読み聞かせをしてもらったかどうかというのが非常に

大きな影響を及ぼしております。本の読み聞かせをしてもらった大人ほど本との関わりが高くなり、読解力も高いということが結果として出てきております。こういう状況をどう改善していったらいいかということは、恐らくこれからの成人の読書教育活動に関わる私たちの課題ではないかと考えております。

以上で、読書への関わりというものが読解力と非常に関係していることをお話しさせていただきました。どうも御清聴ありがとうございました。